

令和元年6月29日現在

機関番号：32809

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K11520

研究課題名(和文) 看護基礎教育における家族看護学教育プログラムの開発と評価

研究課題名(英文) The Development and Evaluation of a Family Nursing Education Program in Baccalaureate Nursing Education

研究代表者

田久保 由美子 (TAKUBO, Yumiko)

東京医療保健大学・看護学部・准教授

研究者番号：20385470

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：現代の家族は多様であり、家族全体を含めた看護が求められている。そこで、基礎教育における家族看護教育の充実を図るため、(1)家族看護学教育を受けた学生の学び、(2)家族看護学教育者が実践している教育上の工夫や課題、(3)全国の看護系大学のシラバスかみた家族看護学教育の現状について明らかにした。教育者は学生がもつ家族観に配慮しながら、能動的に家族を理解できるような工夫をしており、学生も自分の家族観を見つめながら、同級生との意見交換や実習を通して家族と家族看護の理解を深めていた。これら(1)～(3)の結果を基に、家族の築いてきた歴史について思いを巡らせながら学ぶ教育プログラムを考案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

家族看護を実践する上で、家族をどのように捉えていくかは重要であり、学生は家族看護学の講義や実習体験を重ね自分の持つ家族観を主軸にしながら、援助者としての家族観を発展させていた。また、家族看護学の教育者は、学生自身の家族体験と看護師として関わることになる多様な家族との両方を視野に入れ、学生が体感を伴って家族の理解を深められる工夫をしていた。これらは学生時代に学び、考慮すべき内容であり、本研究で開発したプログラムは、これらの要素を含み、現在の過密な看護学教育のカリキュラムを鑑み、1単位、8回程度の授業内で実施できるものであった。

研究成果の概要(英文)：Since modern families are diverse, nursing needs to consider the whole family. In order to improve education about family nursing in baccalaureate nursing programs, the present study clarified the following: (1) the learning experiences of students who received education about family nursing, (2) family nursing educators' educational devices and projects, and (3) the present situation of family nursing education as ascertained through syllabi used at nursing colleges across Japan. The educators paid attention to students' views on their own families to effectively gain understanding of them. Students in turn reflected on their views on their own families, and through discussion with other students and practice sessions deepened their understanding of families and family nursing. Based on the findings of this study, an education program that promotes reflections on family histories was developed.

研究分野：看護学

キーワード：家族看護学 看護基礎教育

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

世界に類をみない超高齢化と少子化、未婚・晩婚化の進行、離婚率や国際結婚の上昇、同性カップルなど家族の構造は多様化し、児童・高齢者虐待等に見られるような家族機能の低下も指摘されている。一方、膨大化する医療費対策として在院日数の短縮化、医療依存度の高い状況での在宅療養や在宅での看取りが推進されている。このような医療を取り巻く変化により、患者個人を対象とした看護から、多彩な背景を持つ家族全体を視野に含めた看護が求められ、基礎看護教育においても家族看護学教育の必要性が認められている。

家族看護学は、1970年代後半に欧米で提唱され、1990年代より日本で紹介されるようになった新しい領域であり、家族の理解を深める枠組みを持ち、家族の問題のみならず強みにも着目する実践的な領域である。しかし、歴史が浅いこともあり、担当できる教員の不足、教授内容や方法についても精練されていないのが現状である。そのため、家族看護学を専門としていなくても、家族看護学教育の質を保証できる教育プログラムの開発が求められる。また、家族看護学を実践する上で影響するのは、各々が自分の経験に基づいて持つ家族観である。そのため、思考の柔軟な学生時代に、幅広く家族を理解する方法を学び、多様な家族に対応できる基礎力を身に付けることは非常に重要であり、学生が能動的に学習することが出来る家族看護学教育プログラムが必要である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、基礎看護教育において、学生が能動的に学習することが出来、かつ、リアリティある家族理解につながる家族看護学教育プログラムを開発し、その効果を検証することである。そのため、以下3つのプロセスを通して現行の家族看護学教育についての調査および評価を行い、学習効果と課題を明らかにした上で家族看護学教育の教材と教育手法を開発する。

(1) 家族劇制作を含めた家族看護学教育の学びの様相 - 履修後1年を経過した看護学生のグループインタビューより -

本研究の目的は、家族看護学を学修後、臨地実習を終了した学生の視点から、家族劇制作を用いた家族看護教育の学習体験を明らかにし、今後の家族看護学教育の示唆を得ることである。

(2) 基礎看護教育における家族看護学教育の現状と課題 - 4年制看護系大学の教育者からのヒアリング -

本研究の目的は、国内の看護系大学で行われている家族看護学の教育者を対象に、実施している教育内容と方法、教育目標および教育上の課題について聞き取り調査を行い、基礎看護教育における家族看護学の現状と課題について明らかにすることである。

(3) シラバスからみた看護学士課程の家族看護学教育の現状

本研究の目的は、全国の看護系大学のカリキュラム及びシラバスを調査し、看護基礎教育における家族看護学教育の現状と課題を明らかにすることである。

3. 研究の方法

(1) 家族劇制作を含めた家族看護学教育の学びの様相 - 履修後1年を経過した看護学生のグループインタビューより -

対象：小林が開発した病に苦悩する家族劇制作を用いた家族看護学の講義を受講後、臨地実習を経て約1年間が経過した学生7名

調査期間：2016年3月

研究方法：フォーカスグループインタビューを実施した。2つのグループに対し、家族看護学の授業で印象に残っていることや臨地実習で役に立ったこと等について自由に語ってもらった。インタビュー内容は許可を得て、ICレコーダーに録音し、逐語録を作成した。

分析方法：山浦が開発した質的統合法(KJ法)を用いた。逐語録から家族看護学および家族看護の内容が含まれる語りを、内容が1つになるように切片化し、個別分析の後、全体分析を行った。

倫理的配慮：研究者の所属機関および研究参加者の所属機関の倫理審査の承認を得て実施した。研究参加者には口頭で説明後、文書で同意を得た。研究の説明およびインタビューは対象者と面識のない研究メンバーが実施した。

(2) 基礎看護教育における家族看護学教育の現状と課題 - 4年制看護系大学の教育者からのヒアリング -

対象：看護系大学で3年以上家族看護学の教育経験のある教員13名。家族看護学の教育・研究者の人的ネットワークを用いて、本研究に適任な人の紹介を得て選定した。

調査期間：2015年11月～2017年5月

研究方法：半構成インタビューを実施した。インタビューの内容は、実施している家族看護学の教育内容や方法、基礎教育での到達目標、教育上の課題、協力者の教育背景であった。インタビュー内容は許可を得てICレコーダーに録音の上、逐語録を作成した。

分析方法：逐語録を精読し、「教育上の工夫と課題」についての文脈を抽出し、研究者間で統一

した見解となるまで内容分析を実施した。

倫理的配慮：本研究は研究者の所属機関の倫理審査委員会の承認を得た上で、対象者に口頭と文書で説明後、文書で同意を得た。

(3) シラバスからみた看護学士課程の家族看護学教育の現状

対象：一般社団法人日本看護系大学協議会の平成 28 年度大学一覧に記載された看護系大学 254 校

調査期間：2016 年 9 月～12 月

研究方法：対象大学のホームページにアクセスし、公開されているカリキュラム一覧やシラバスから、平成 28 年度の「家族看護学」や「家族看護論」等の家族看護に特化した科目のカリキュラムおよびシラバスを検索しデータとした。

分析方法：得られたデータから、開講学年、授業回数、必須/選択、科目責任者の専門領域、使用教科書、授業方略、学習目標等についてのフォームをエクセルソフトで作成し、それぞれ項目について整理した。

4. 研究成果

(1) 家族劇制作を含めた家族看護学教育の学びの様相 - 履修後 1 年を経過した看護学生のグループインタビューより -

2 回のフォーカスグループインタビューを実施し、合計時間は 113 分であった。132 のラベルを得て、6 つの最終ラベルを抽出し、以下の 6 つのシンボルマーク（下記の表記は【事柄：エッセンス】）を得た（図 1）。

学生たちは、家族劇を制作し、演じるまでの一連の過程を通じて【家族劇制作過程の印象：グループワークで行うことの負担感と興味関心あるテーマで台詞などを考える楽しさ】や【家族劇という疑似体験から得る学び：作る、演じる、見る過程での当事者としての家族の思いと他者との家族観の違い】という集団を基盤とした学びを得ていた。これらの家族看護学の学習と他領域での学習が波及して、臨地実習では、【家族アセスメントの展開：図式化の有用性と家族に対する熟慮】と【家族看護への思い：家族を看護する必要性の認識と家族への関わりに対する困難性】の両面を経験しながら学びを深め、その結果【家族看護学への思い：患者を取り巻く家族を支える科目としての重要性】を理解し、【更なる家族看護学教育へのニーズ：実習を終えたからこそ感じる基礎となる知識の重要性と他の科目との関連】を感じていた。

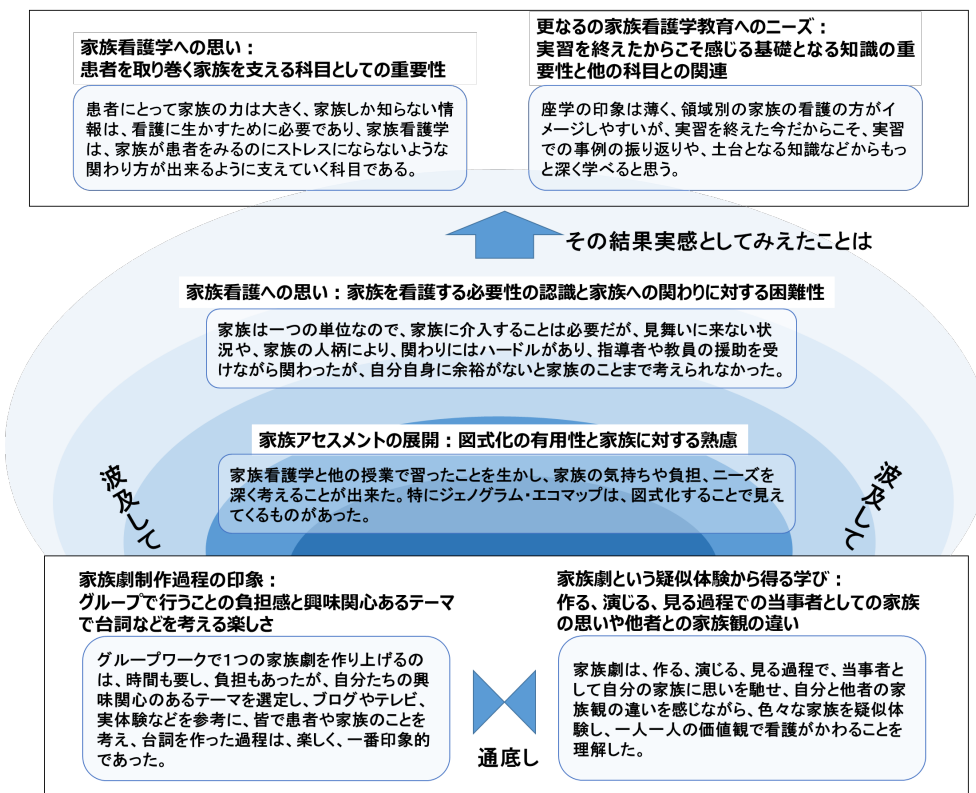


図 1 家族劇制作を含めた家族看護学教育の学び

本研究により、家族劇制作は、「作る・演じる・見る」の全ての過程において、学生が自分の持つ家族観を見つめ、さらに家族の多様性を理解することにつながっており、その後、他領域での学習と統合されて、臨地実習での家族看護の実践に発展していたことが明らかとなった。しかし、学習を深めたことで、更なる学習のニーズがあることが判明した。家族看護は、家族看護学と様々な領域を横断して学習していくものであり、学習内容や時期、学習の連続性、相違性について検討していくことの重要性が示唆された。

(2)基礎看護教育における家族看護学教育の現状と課題 - 4年制看護系大学の教育者からのヒアリング -

対象者の家族看護学の教育歴は5年～24年で、家族看護学以外の専門領域は、在宅4名、基礎3名、成人2名、小児2名、母性2名であった。対象者のインタビュー時間は29分～90分で、平均61分であった。科目終了時の到達目標は、家族もケアの対象であることへの理解は共通しており、家族の多様性や家族観の理解、システムとしての捉え方等であった。また、大学卒業時の到達目標は、家族との会話や介入ができる実践レベルを挙げた人と、科目終了時と同様の内容とした教育者がいた。

教育上の工夫や課題について抽出されたのは259テキストで、そこから58のコード、13のサブカテゴリー、5つのカテゴリーが抽出された。

家族看護学の教育者は、「学生のもつ家族観に注意を向ける」「学生を揺さぶり家族・家族看護の理解を深める」「家族看護の実践者となるための基礎をつくる」工夫をしていた。また、「基礎教育での家族看護の位置と繋がり」「教育側環境の充実」という課題を抱いていた(表1)。

表1 家族看護学教育における教育上の工夫や課題分析結果

カテゴリー	サブカテゴリー	人数	テキスト数
学生のもつ家族観に注意を向ける	学生のもつ家族観に注意を向ける	11	35
	学生を揺さぶり家族・家族看護の理解を深める	9	36
家族看護の実践者となるための基礎をつくる	学生を参加させるしかけ	8	24
	実習経験を生かす	6	10
	将来の実践を見据える	6	20
	家族看護を基礎に置く	6	10
	家族看護の視座を重視する	9	22
	事例を活用する	11	26
基礎教育での家族看護学の位置と繋がり	専門教材を活用する	6	11
	学内での家族看護の位置づけと連携	8	25
	国内での家族看護教育の位置づけ	7	15
教育側環境の充実	必要とされる教授法の発展	3	14
	授業展開する上での障壁	6	11

カテゴリー「学生のもつ家族観に注意を向ける」は、7つのコードから構成されており、教育者は学生の複雑な家族背景を考慮し、敢えて自分の家族観と対峙させている人と、自分の家族を想起させない配慮をしている人がいた。そして、対峙させている場合はその意義を伝えていた。また、経験の乏しい学生ゆえに、学生の家族の捉え方や、看護の対象としての家族理解のむずかしさに理解を示していた(表2)。

表2「学生のもつ家族観に注意を向ける」のコードおよびテキスト数

コード	人数	テキスト数
自分の家族観と対峙させる	5	8
看護の対象としての家族イメージの難しさ	5	8
自分の家族を想起させない配慮	4	7
自分の家族観の対峙することの意義を伝える	3	3
表出された学生の家族状況を気にかける	3	4
今の学生の家族の捉え方に理解を示す	3	3
学生の家族背景の複雑さ	2	2

カテゴリー「学生を揺さぶり家族・家族看護の理解を深める」は、14のコード、3つのサブカテゴリーから構成された(表3)。

表3「学生を揺さぶり家族・家族看護の理解を深める」のコードおよびテキスト数

サブカテゴリー	コード	人数	テキスト数
体感を伴った家族理解	映画・DVD・体験記を用いた家族の理解	7	16
	家族の立場を考え演じる	4	7
	当事者家族の生の声	2	2
	理論より家族の立場を伝える	1	5
	俳句で相手に関心に向ける	1	3
	データや記事による現代家族の理解を深める	1	2
	上級生による実習で出会った家族の語り	1	1
学生を参加させるしかけ	課題で理解を深める	4	6
	学生の意見を引き出す	4	5
	学生同士の講義・評価	2	7
	学生の心が動く質問を考える	1	2
	学生の発言を肯定する	1	4
実習経験を生かす	実習体験を踏まえた授業	5	8
	実習における家族看護モデル・理論の活用	2	2

教育者は、学生から意見を引き出すなど授業に参加させるしかけと、映画や体験記、ロールプレイ、当事者の生の声など、体感を伴って家族を理解できるような工夫していた。また、実習の体験を活用し教材としていた。

家族看護を学ぶ上で、家族をどのように捉えていくかは重要であり、学生は自分の持つ家族観を軸にしなが、援助者としての家族観を発展させていくことになる。本研究により、家族看護学の教育者は、学生自身の家族体験と看護師として関わることになる多様な家族との両方を視野に入れ、学生が体感を伴って家族の理解を深められる工夫をしていたことが明らかとなった。また、将来家族看護を实践するうえでの基礎となるスキルや視点、活用できる知識の教育に重点をおいていた。これらの教育内容・手法は家族看護学に特徴的であると考えられる。他領域の教育者にこれらの理解が深まることで、本研究での課題として挙げられていた、基礎教育での家族看護学の位置付けや教授方法の発展に繋がってることが推察された。

(3) シラバスからみた看護学士課程の家族看護学教育の現状

看護系大学 254 校中、家族看護に特化した科目が設置されていたのは 163 校(64.2%)で、88 校が設置なし、3 校が不明であった。大学別にみると国立大学 23 校(52%)、公立大学 33 校(69%)、私立大学 107 校(66%)であった。

シラバスが入手できたのは 130 校で、2 科目以上設置していた大学が 8 校あり、計 139 科目であった。その内、必須が 88 科目(63.3%)、選択が 41 科目、不明が 10 科目であった。単科目設置の大学 122 校の開講学年は 2 学年が 60 校、3 学年が 37 校であった。1 大学あたりの総授業回数は 7~39 回で、8 回が 73 校と最も多かった(表 4)。複数科目設定校は、多学年に渡る場合と単学年のみの両方があり、授業回数は 16~39 回であった。

表4 単科目設置大学の概要 N=122

対象学年	大学数	授業回数	大学数
1年	7	7回	5
2年	60	8回	73
3年	37	9~11回	4
4年	16	15回	37
その他	2	16回	3

使用している教科書は、鈴木・渡辺著「家族看護学 理論と実践」が 51 校、山崎・原編著「家族看護学: 19 の臨床場面と 8 つの実践例から考える」が 31 校、教科書を用いていないのは 29 科目であった。科目責任者の専門領域は、在宅・公衆衛生 60 名、小児 23 名、母性 14 名であった。また、外部講師の担当が 13 科目、担当者未定が 3 科目あった。

授業方略としては、講義形式以外に、事例検討や家族看護過程展開の演習を取り入れているのが 87 科目と 6 割以上であった。また、事例検討等にグループワークを用いているのが 64 件と多くあった。

表5 授業方略 N=139

授業方略	科目数
事例検討・家族看護過程展開あり	87
グループワークあり	64
領域別(複数)の看護あり (内19件がオムニバス形式)	41
ロールプレイ・演劇制作あり	13
ゲストスピーカーあり (内8件が家族支援CNS)	13

評価方法は、テストとレポートや課題を合わせて行っているのが 66 科目で、レポート・課題のみが 33 科目、テストのみが 22 科目であった。

科目の到達目標としては、「家族・家族看護・家族アセスメント・家族支援の理解」の理解レベルまでを設定しているのがどの学年も 6 割以上であった。しかし、学年が上がるにつれ、「家族アセスメントや援助計画ができる」の割合があがっていた。コミュニケーションスキルやインタビュー技術の習得・実施までを目標に挙げているのは 4 科目のみであった(表 6)。

表6 科目の到達目標

対象学年	到達目標		
	家族・家族看護・家族アセスメント・家族支援の理解	家族アセスメントや援助計画ができる	技術の習得・実施
単科目大学	1	6 (85.7%)	1 (14.3%)
	2	44 (74.6%)	14 (23.7%)
	3	23 (63.9%)	10 (27.8%)
	4	10 (66.7%)	5 (33.3%)
複数科目大学	3 (37.5%)	5 (62.5%)	0

本研究により、家族看護に特化した科目は約 6 割以上の大学で教育されており、家族看護学教育が浸透していることが考えられるが、必修科目は約 4 割程度と推測され、学習している大学生が多いとは言えないことが明らかとなった。また、グループワークや事例検討、ロールプレイを取り入れるなど能動的な学習の工夫がされている一方で、学内の教育者の不足や、オムニバス形式なども多くあり、教育の一貫性や継続性、各領域別教育内容との関連性や相違性などの課題が考えられた。

我が国の過密なカリキュラムの現状と本結果を踏まえると、まずは 1 単位、8 回程度の授業

に含めるべき教授内容を明確にし、「家族看護」を冠する科目で教えるべきもの、他の科目には含められないものは何かを明確にすべきと考える。また、教育年次は1年から4年まであり、その到達目標にも若干の違いがみられているが、家族看護は全教育課程を横断しながら学習を深められるため、家族看護に関する卒業時のコンピテンシーを明確にする必要が示唆された。

上記(1)(2)(3)の研究結果と文献検討の結果から、家族看護学の教育プログラムを考案し、8名の看護学教育者から専門的な評価を得た。

考案したプログラムの概要は、看護師が家族に問題が生じていると考えている事例から、その家族の歴史のストーリーを作成するグループワークである。グループワークを通して、家族の関係性や役割等について過去から現在にかけての理解を深め、同時に自己の家族観にも目を向けることを意図とした。さらに、その事例の家族の強みを考え、複数の家族員に対して考えた問いかけを模擬的に実践する要素も含めた。本プログラムの実施を通して、家族の多様性の理解、家族の歴史を知ることによって家族の見方が変わる体験、会話を通して家族支援をすることの実践的理解を目標とした。看護学教育者からは本プログラムのねらいについては概ね良い評価を得ることができた。また、学生に実施する際には、事例の設定についての検討が必要であり、特に対象とする学年に応じて事例を理解する上で必要となる知識についての配慮等の課題を得た。

本プログラムの実施に要した時間は約3時間の2コマ分であり、1単位8コマの科目に用いた場合であっても、講義と合わせて実施するには適切な時間配分であると考えられた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

(1) 田久保由美子、小児領域における家族支援看護 基礎教育における家族看護教育の現状、小児保健研究、査読無、Vol.77、No.6、2018、pp.537 - p.539

〔学会発表〕(計8件)

(1) 田久保由美子、臼井雅美、坂野朋未、金子あけみ、看護基礎教育における家族看護学教育の現状 - 看護系大学の教育者からのインタビュー調査より -、日本家族看護学会第25回学術集会、2018

(2) 田久保由美子、臼井雅美、坂野朋未、金子あけみ、シラバスからみた看護学士課程の家族看護教育の現状、日本家族看護学会第24回学術集会、2017

(3) Yumiko Takubo, Masami Usui, Tomomi Sakano, Akemi Kaneko, The Current Situation and Issues of Family Nursing in Baccalaureate Nursing Education: Interviews with Educators at a Nursing University in Japan, 13th International Family Nursing Conference, 2017

(4) 田久保由美子、臼井雅美、坂野朋未、金子あけみ、家族劇制作を含めた家族看護学教育の学びの様相 履修後1年を経過した看護学生のグループインタビューより、第36回日本看護科学学会学術集会、2016

(5) 坂野朋未、田久保由美子、臼井雅美、金子あけみ、看護基礎教育課程用教科書における家族看護に関する記述内容の分析 領域別教科書の分析より、日本家族看護学会第23回学術集会、2016

(6) 臼井雅美、田久保由美子、家族および家族看護の概念に関する看護基礎教育用教科書の記述の現状 - 小児・母性看護学領域に焦点をあてて -、日本小児看護学会第26回学術集会、2016

(7) Yumiko Takubo, Akemi Kaneko, Masami Usui, Trends in Family Nursing Research in Japan: Analysis Using Text Mining, 12th International Family Nursing Conference, 2015

(8) 田久保由美子、臼井雅美、養育期の家族看護の研究動向 - テキストマイニングを用いた抄録の分析 -、日本小児看護学会第25回学術集会、2015

6. 研究組織

(1) 研究代表者

研究分担者氏名：田久保 由美子 (TAKUBO YUMIKO)

所属研究機関名：東京医療保健大学 千葉看護学部・准教授

研究者番号：20385470

(2) 研究分担者

研究分担者氏名：臼井 雅美 (USUI MASAMI)

所属研究機関名：東邦大学 健康科学部・教授

研究者番号：50349776

研究分担者氏名：坂野 朋未 (SAKANO TOMOMI)

所属研究機関名：国立看護大学校 看護学部・助教

研究者番号：50735892

研究分担者氏名：金子 あけみ (KANEKO AKEMI)

所属研究機関名：東京医療保健大学 東が丘・立川看護学部・准教授

研究者番号：80588939